



ドクター・ハザマの

バイタルサイン塾 19

薬剤師の存在意義を高めるチーム医療参画

ファルメディコ株式会社
大阪大学大学院医学系研究科生体機能補完医学講座
医師・医学博士 狭間 研至

チーム医療において 医師と看護師はなぜ強固に連携できるのか

薬剤師にとって、医師と看護師の連携は、ある意味強固であり、なかなか入りづらい感覚を持ちやすいかも知れません。これは、看護師は保健師助産師看護師法の中で「診療の補助」と「療養の世話」を行うことになっていることと関係があるかも知れません。しかし、それだけではありません。

患者はその病状経過の中で、発熱、疼痛、呼吸困難、血圧変動、浮腫、腹痛、眠気、せん妄などさまざまな症状を呈します。この患者さんを、医師、看護師はそれぞれの立場で客観的データ（＝バイタルサイン）をもとに評価します。医師と看護師が連携を組むことができるのは、この患者情報を、時間軸をそろえて理解していることが前提としてあるからだと思います。しかし、これだけでは、きちんと連携を組むことはできません。

例えば、介護施設などではヘルパーさんが主に血圧、脈拍、体温、SpO₂などのバイタルサインを収集してくれていますし、それらを適宜医師や看護師に報告してくれますが、医療としての連携の中に入ってくることはありません。

それは、その評価があるかないかによります。つまり、医療専門職というものは、目の前で起こっている事象について、自分なりのアセスメント、解釈、すなわち「謎解き」を行うのだと思います。

さらに、重要なのは、医師と看護師とで「謎解き」を行う背景が医学と看護学ということで異なることです。医師と看護師の見方、患者へのアプローチの仕方が微妙にずれていることで、お互いに意見交換をしながら治療を進めていけるのだらうと思います。

バイタルサインが切り拓く 薬剤師のチーム医療参画の必然

このように考えると、医師と看護師が強くつながったチーム医療への参画に薬剤師が多少のギャップを感じるの、次のように言えるかも知れません。

- 1) 法的には、薬剤師は「調剤、医薬品の供給、その他薬事衛生」を、医師は「医療および保健指導」をつかさどり、ともに「国民の健康な生活を確保する」ことが目的の独立した存在であること
- 2) 患者の状態を、同じ時間軸で共有できていなかったこと
- 3) 薬剤師による「薬剤師ならではの」のアセスメントが十分ではなかったこと

本連載のテーマであるバイタルサインは、2)の条件を満たすことになりすし、3)は、薬剤師が自分で収集したか、患者さんの情報共有の中で入手したかは別として、患者についてのバイタルサインを得たあと、薬理学、薬物動態学、製剤学など薬学的専門性に基づいて評価することによって可能になります。

そして、これら2)と3)の条件がクリアできれば、1)のように医師と独立して、そして法的には対等な立場にある薬剤師がチーム医療に参画することは、そのチーム全体の医療の質を向上させるはずで。

薬学教育6年制は養成課程としても医師とつりあう裏付けになりますし、薬剤師の独自性、独立性が高まることで、昨今話題の共同薬物治療管理の意味合いも深まっていくと考えています。